

# 「第3回 TSR 総合調査」報告書

TSR 総合調査実行委員会  
(IR・EM センター分析)

平成29年8月～平成30年1月調査



平成30(2018)年3月

## 1 はじめに 第3回 TSR 総合調査報告書完成にあたって

～本調査の意義と改善のサイクル～

TSR 総合調査実行委員長  
副学長 小嶋知善

平成 29 (2017) 年度に行われた第 3 回 TSR 総合調査の報告書がここに完成しました。今回の調査にご回答いただきました高等学校、さらに、ヒアリング調査にご協力いただきました高等学校の進路指導部や入試担当の先生方におかれましては、この場をお借りして改めて篤く御礼申し上げます。そして、この調査に協力していただいた卒業生の方々と本学学生諸君に対しましても深く感謝申し上げます。

この調査の分析と報告に関しましては、本学の「IR・EM センター」が力を発揮してくれました。同センターは、本学で行っている調査のみならず、大学の運営や業務改善に関する調査やデータ分析に力を発揮しています。

また、この調査の運営と実行については、TSR 総合調査実行委員会の教職員の働きがありました。皆さまにも御礼申し上げます。

以下に、本報告書ができ上るまでの経緯と、この調査報告書に基づいた改善のサイクルについて、少しく述べさせていただきます。

第 3 回 TSR 総合調査を行うにあたっては、過去二回行ってきた調査と同様に、TSR 総合調査実行委員会を立ち上げました。そして、この委員会で調査の基本方針と実行のプロセスを決定し、進捗状況を確認しながら進めてまいりました。

過去の調査を振り返ると、第 1 回調査（平成 27 年度）では、本学学生全員に対するアンケートと面談による聞き取り調査を主体として行いました。この面談による聞き取り調査は、職員がチームを組んで調査に当たりました。聞き取りには手間がかかりましたが、学生の考えていることを丁寧に聞き取ることができました。調査の結果と分析については、大学の HP 上に公開しております

大正大学公式ホームページ

第 1 回 TSR 総合調査の実施について

[https://www.tais.ac.jp/guide/latest\\_news/20151121/37942/](https://www.tais.ac.jp/guide/latest_news/20151121/37942/)

「第 2 回 TSR 総合調査」報告書を掲載しました

[https://www.tais.ac.jp/guide/latest\\_news/20170818/51195/](https://www.tais.ac.jp/guide/latest_news/20170818/51195/)

第2回調査（平成28年度）では、全学生へのアンケート（この回からマークシートで行うことにしました）を前年度調査と同様に行うとともに、ステークホルダーでもある高等学校へのアンケートを行いました。さらに、高等学校に個別に足を運び、先生方へのヒアリング調査をさせていただきました。一方、全学生へのアンケートでは、前年度のアンケート結果を受けて、本学の教学面や施設面での学生からの指摘が改善されているかを問う項目も入れました。このことは、TSR 総合調査を発案し実行するときに目的として掲げた「教育の質の向上と経営の強化を実現するために、マネジメントサイクルを構築する」という方向を踏まえたものです。本学の様々な取り組みがステークホルダーの期待に応えているか、満足感を与えているかを検証することこそが、次のステップに繋がると考えたからです。

上記のような過去二回の調査と、その結果・分析を受けて行われたのが、第3回調査です。今回の調査は、ステークホルダーでもある卒業生に向けてのアンケート調査（ウェブを使い実施）、また前二回同様に高等学校に向けてのアンケート、さらに、今回も高等学校に足を運び、先生方へのヒアリング調査をさせていただきました。また、引き続き全学生へのアンケート（マークシートで実施）を行いました。

調査のデータを分析した結果から、本学の強みがわかる一方で、まだまだ力の及んでいないところ、改善を図らなければならないところも明確になりました。（その詳細については、本報告書に示した「概要」および「結果」に譲ります）。

大正大学では、教育の質の向上と経営の強化を実現するため、TSR マネジメントサイクルを構築しつつあります。本学のマネジメントサイクルは、大正大学における教育と経営の全ての活動が、全体に共通の方向性と整合性を持って着実に実施されるようにしようとするものです（図1参照）。

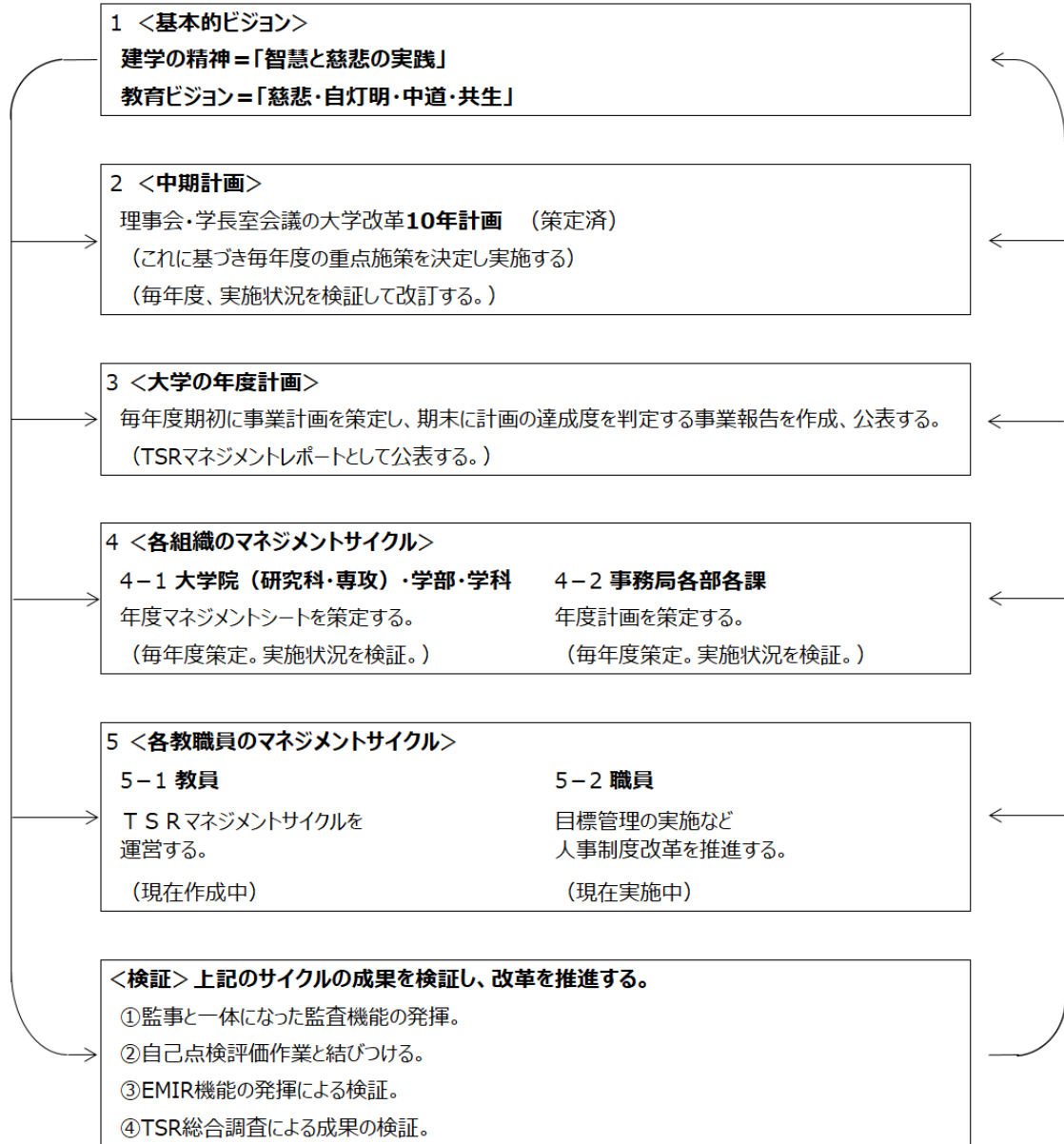
TSR 総合調査は、全学のマネジメントサイクルを動かす原動力ともいえる重要な役割を担っており、その効果は大きいと判断されます。この調査は大正大学におけるPDCAサイクルの確立そのものに寄与するものです。今後も、学生調査と様々なステークホルダー調査を組み合わせ、TSR 総合調査を継続したいと考えております。

従前の報告書にも記しておりますが、調査結果は大学の教育環境と施設の改善に大きな力を発揮するものです。すぐに方策を講ずることができなかったものについても、その問題を解決すべく各方面で考えて頂くように引き続き要請を行っていく所存です。また、上記のように、調査結果については、学内で共有するのみならず、学外へも公表しております。そのことで、大学の姿勢と今後の針路を明らかにしていきたい所存です。

今後とも、この調査へのご理解とご協力をなにとぞよろしくお願い申し上げます。

## 大正大学のマネジメントサイクル

大正大学は、教育の質の向上と経営の強化を実現するため、下図のとおりマネジメントサイクルを構築しつつある。TSR総合調査は、このサイクルの検証の要となる重要な位置づけとなっている。



◎ 上記サイクルを確立することにより、10年後の大学創立100周年（2026年）を目指し、ステークホルダーの満足度を向上させ、知名度を高める大学ブランディングを推進する。

図1 大正大学のマネジメントサイクル

## 2 第3回 TSR 総合調査結果の概要

第3回 TSR 総合調査では、調査対象とする本学のステークホルダーを、高等学校と本学在学生及び卒業生とした。高校調査については、本学の担当副学長あるいは担当学長補佐を含む2人一組での高等学校教員に対し、ヒアリング調査を実施した。本学在学調査については、第2回 TSR 総合調査と同様に、アンケート調査を実施した。また、本学卒業生調査については、ウェブサイトを利用する形式でのアンケート調査を実施した。

それぞれの調査方法の概要の説明は割愛し、ここでは調査結果の概要のみ記載する。

### 2-1 高等学校を対象とする調査結果の概要

高等学校を対象とするヒアリング調査の結果、今後の本学の学生募集や入試改革、高大接続、教育改善のうえで、以下のような知見が得られた。

- (1) 高等学校の進路指導方針は、AO 入試や推薦入試ではなく、大学入試センター試験や一般入試での受験を、生徒にめざさせる方針が主流である(科目数は3科目が中心)。一方で、AO 入試や推薦入試を重視せざるを得ない高等学校も一定数ある。
- (2) 平成 33 年度入試から AO 入試や推薦入試の出願・合格発表時期を晩期化する文部科学省の方針については、高等学校の学習進度や進路先である大学を検討する上で、賛同する声が多い。
- (3) 本学の平成 30 年度入試での変更点に関し、一般中期日程の新設については、ほぼ全ての高等学校から、受験機会の増加を主な理由として、好感を持って受け止められている。一方で、併願形式の変更(コース併願から学科併願へ)については、高等学校からあまり大きな関心はなく、影響は少なかった。
- (4) いわゆる「新入試」へ対応状況に関し、英語の外部試験の導入については、高等学校の対応が既に進んでおり、ネガティブな反応はほとんどない状況にある。外部試験の具体的な内容について、英検から GTEC に急速に切り替わっている。
- (5) いわゆる「新入試」へ対応状況に関し、育成型入試については、丁寧にマッチングし、選抜自体を教育活動として実施することに対し、総論では賛同する声が多いが、具体的な受験指導を考えると、教員や生徒の負担増や不合格の際の生徒の気持ちの切り替えが困難なこと等に負担を感じる高等学校が多い。
- (6) いわゆる「新入試」へ対応状況に関し、調査書が e ポートフォリオ化することについては、①導入スケジュールに余裕がないこと、②大学入試を見据えた情報の蓄積内容、③高校生自身に輸入をさせる指導等に困難を感じている状況にあるが、高等学校と大学との情報の接続することには、期待する声が聞かれた。
- (7) 高大接続について、必要性の理解は進んでおり実施している高等学校もあるが、具

体的な実施の上では、地理的な要因と日程、生徒数の多さ、生徒の興味・関心とのマッチング等で困難を感じている。関連して、高大接続から進路決定に繋げるタイプの入試の在り方にも概ね賛成であるが、先の理由で自校の生徒が不利になることには不安を感じている。

- (8) 本学の受験を勧める理由としては、半数以上の高等学校から「最寄り駅から近いことや周辺的生活環境」「1 つにまとまっている小規模キャンパス」「90 周年を迎える伝統」が挙げられた。一方で、「知名度が低い」ので、もっと PR すべきであるという意見があった。
- (9) 高等学校にとって信頼できる大学とは、学生の面倒見が良く、力をつける経験を積ませ、しっかりと成長させる大学である。
- (10) 東京 23 区内の大学の定員抑制について、高等学校への影響は大きく、一般入試のみならず AO 入試、推薦入試でも難化の傾向を感じている高等学校が多い。

## 2-2 本学在学学生を対象とする調査について

本学在学学生を対象とするアンケート調査の結果、今後の本学の教育改善や教育支援の充実を図るうえで、以下のような知見が得られた。

- (1) 本学の志望順位について、高校 3 年 4 月段階では「第 1 志望」(39.1%)と「第 4 志望以下」(32.1%)に、大きく二分される。一方で、受験時では、「第 1 志望」(64.8%)と「第 2 志望」(15.7%)となり、その他の選択肢は 10%を越えない。AO 入試、推薦入試には前者が多いが、センター利用入試や一般入試では後者が多い。また、入学者には、潜在的に、第 2 志望以下の者が多いことに留意すべきである。
- (2) 本学の総合的な満足度について、「大変満足」の比率を、入学時点と入学後の現在とを比較すると、それぞれ 20.4%と 13.7%であり、現在の方が低い。ただし、「大変満足」と「ある程度満足」の合計比率は、それぞれ 66.6%と 72.3%であり、現在の方が比率が高くなっている。
- (3) 現在まで大学生活を経験して、総合的な満足度は、「大変満足」(13.8%)、「ある程度満足」(58.6%)と合計 72.4%がポジティブな回答である(昨年度合計は 69.1%)。
- (4) 入学時に本学に期待していたことでは、「専門的な学問を修得すること」(38.6%)、「将来の目標や夢を発見すること」(26.2%)、「資格を取ること」(12.3%)までが上位 3 位であり、他の項目は 10%を越えない。
- (5) 入学後現在まで大学生活を経験し、入学前の期待に対し、「期待以上」(10.6%)、「期待通り」(25.3%)、「まずまず期待通り」(47.2%)と合計 83.1%がポジティブな回答(昨年度合計は 79.1%)であり、一方、ネガティブな回答は「あまり期待通りではない」(14.2%)、「まったく期待通りではない」(2.6%)であった。
- (6) 各項目の満足度について、満足度(「とても満足」「ある程度満足」の合計)の高い項

目から順に、「駅からの距離や大学周辺の生活環境」(76.2%)、「小規模で1つのキャンパスのまとまっている規模感」(70.3%)、「学生同士の交友関係」(68.4%)、「Ⅱ類科目の授業内容や教授法」(66.3%)、「Ⅱ類科目(各学科の専門教育科目)の授業内容や教授法」(61.2%)、「教員の教授法・研究業績・知名度や人間的な魅力」(51.2%)であった。18項目中で50%を越えたのは、この6項目のみである。

- (7) 大学生活を通しての成長実感について、「教養の広がり」「専門性の向上」「人間的な成長」「社会で生き抜く力」の中では、「専門性の向上」を最も得られたと実感している(「とても得られたと思う」「まずまず得られたと思う」の合計は81.3%)。
- (8) 本学の信頼度について、「大変信頼できる」(11.4%)、「信頼できる」(51.4%)と、62.8%がポジティブな回答(昨年度合計は57.1%)であり、一方で、「あまり信頼できない」「まったく信頼できない」の合計は9.2%(昨年度合計は9.4%)であった。
- (9) 本学の後輩への推奨度では、9点満点(0点~9点での回答)で回答を求めた結果、平均5.1点(昨年度4.9点)であった。6点以上の合計比率は41.7%と昨年度より4ポイント上昇した。
- (10) 全体を通して、ほとんど全ての質問項目で、ポジティブな回答が、昨年度調査よりも微増している。

### 2-3 本学卒業生を対象とする調査について

- (1) 学生生活で力をもっとも力を入れた活動は、高い比率から順に「大学での勉強」(37.2%)、「クラブ・同好会・サークルなどの課外活動」(26.3%)、「趣味」(14.3%)。他は10%を越えない。
- (2) 本学を卒業し、最も習得や達成できたことは、高い比率から順に「幅広い人間関係を得た」(25.7%)、「専門的な学問や研究に関する知識・技術を習得することができた」(24.3%)、「資格を取ることができた」(20.2%)、「一般教養を深めることができた」(10.8%)。一方で、入学時における本学への期待<複数回答>は、「専門的な学問や研究に関する知識・技術を習得すること」(60.5%)、「資格を取ること」(45.6%)、「幅広い人間関係づくり」(41.6%)であり、入学時の期待とほぼ同様の順位で、それぞれの項目を習得や達成したことがわかる。
- (3) 本学を卒業し、入学前の期待と比較して、本学の教育内容については、「期待以上または期待通りだった(大変満足)」(20.4%)、「ある程度期待通りだった(ある程度満足)」(52.5)%とポジティブな回答の合計が72.9%。一方で、ネガティブな回答は、「あまり期待通りではなかった(やや不満)」5.2%、「全く期待通りではなかった(かなり不満)」1.5%と低く、合計比率も10%を超えない。
- (4) 本学を卒業し、入学前の期待と比較して、大学生活の総合的な満足度は、「期待以上または期待通りだった(大変満足)」(27.6%)、「ある程度期待通りだった(ある程度満足)」(49.1%)とポジティブな回答の合計が76.7%。一方、ネガティブな回答

- は、「あまり期待通りではなかった（やや不満）」4.1%、「全く期待通りではなかった（かなり不満）」1.8%と低く、教育内容の満足度と同様の傾向である。
- (5) 本学で習得出来た能力や知識について（15項目中）、ポジティブな回答の合計比率は、上位から「人間性の豊かさ」（86.2%）、「礼儀やマナー・協調性・責任感などの集団生活に必要な社会性」（84.8%）、「専攻した学問の体系化された知識や技術」（81.4%）、「コミュニケーション能力」（77.3%）、「豊かな教養による社会を見る上での広い視野」（75.4%）であり、汎用的な能力と、専門性や教養という学修内容を習得出来たと感じている卒業生が多い。
- (6) 本学の校風・教育方針について（9項目中）、ポジティブな回答の合計比率が70%を越えるのは、「歴史・伝統がある」（94.5%）、「校風・雰囲気が良い」（83.8%）、「信頼できる大学である」（78.4%）。一方で、ネガティブな回答の合計比率が30%を越えるのは、「世間一般的に難易度が高い」（64.1%）、「情報発信力がある」（32.3%）。
- (7) 本学の教学内容、教学環境について（27項目中）、ポジティブな回答の合計比率が70%を越えるのは、「専門教育が充実している」（80.8%）、「熱心な教員や丁寧に指導してくれる教員が多い」（75.8%）の2項目。一方で、ネガティブな回答の合計比率が30%を越えるのは、「他大学との交流が多い」（59.8%）、「外国人の教員や留学生が多い」（31.9%）。「海外留学制度が充実している」もネガティブな回答の合計比率が23.9%と、約4人に1人がネガティブな回答である。また、他の学生調査等でも指摘されているITの施設設備については、ネガティブな回答の合計比率が「ITを活用した教育が充実している」（27.7%）、「IT設備やシステムが充実している」（26.8%）と、4人に1人を超える者がネガティブな回答をしている。
- (8) 本学での学生生活で得た教育内容や経験が現在の仕事で役に立っているかについては、「非常に役に立っている」（25.9%）、「ある程度役に立っている」（55.7%）とポジティブな回答の合計が81.6%であり、極めて高い比率である。
- (9) 本学卒業後すぐに就いた仕事に満足しているかについて、「大変満足している」（19.8%）、「ある程度満足している」（35.0%）、「どちらともいえない」（22.2%）、「あまり満足していない」（12.9%）、「全く満足していない」（10.2%）。ネガティブな回答の合計比率は23.1%であり、約4人に1人が新卒時の就職先に不満を抱えている様子が理解される。
- (10) 卒業後すぐに就職した卒業生のうち、「転職した」（43.1%）、「離職した（現在仕事に就いていない）」（14.1%）、「起業した」（0.3%）で、約60%が仕事を変えている。転職・起業・離職した卒業生のうちの72.5%が、最初の仕事に就いてから3年以内に転職等の行動をとっている。すなわち、全体の38.1%が3年以内に転職等をしている。



**【第3回 TSR 総合調査実行委員会】**

委員長 副学長 小嶋知善

委員 副学長 木元修一

理事長特別補佐、質保証推進室長 上杉道世

学長補佐、EM 研究所所長/IR・EM センター長 福島真司

EM 研究所/IR・EM センター 日下田岳史

EM 研究所 和田浩行

学長室長 阿部海秀

学長室企画調整担当部長補佐 高橋慈海

学長室企画調整課長 加藤真紀子

学長室入試課長 平野明宏

学長室企画調整担当 長島法子

学長室企画調整担当 須藤隆史

学生支援部長 井上隆信

学生支援部就職担当部長 山田英貴

学生支援部就職課長 矢沢忠之

学生支援部卒業生課長 馬場みゆき

**第3回 TSR 総合調査実施委員会開催日時（合計7回開催）**

2017年：第1回7月18日、第2回8月8日、第3回9月12日、第4回10月17日、  
第5回11月21日

2018年：第6回3月6日、第7回5月8日